

「音楽」が生成する学びの空間

シュタイナー教育にみるピュシスとしての音楽創造

東京学芸大学・准教授
小西 公大

1. 音楽を研究すること

サウンド（音）やミュージック（音楽）を「研究」することは、考えれば考えるほど酔狂なものに思えてくる。本来ロゴス（言語・論理・理性）では計り知れない領域を覆い、「自然」のミメシス（模倣）や超自然的世界とのコミュニケーションをその発端とするピュシス（万物の生成と変化の力学）の世界に属する人類の技巧を、再び我々はロゴスの世界において把捉しようというのだから。ましてやそれを次世代へ教え伝えようとする「教育」という分野において考えようというのも、また随分と無理のある話だろう。なぜなら、本来ロゴスで把捉できないものを、継承のために体系化しようということ自体、語義矛盾を抱えた営為だからだ。それが可能となるのは、継ぎ目のない音のスペクトラムに恣意的な境界線を引きながら、音の構成＝「音楽」をロゴスと同様に接合・分析しようのものであると試行錯誤してきた人間の歴史的蓄積があるからである。しかしそれらは躍動するピュシスとして、その力の生成のダイナミズムとして音楽を捉えようとする世界線とはいくぶん袂を分かってしまっているようにも思う。

インドの沙漠エリアで音楽や芸能の研究を進めてきた筆者にとって、上記のような問題系は常に頭を悩まし続けてきた。文盲の沙漠の楽師たちが紡ぎ出す魅力の溢れた音楽の世界に肉薄するための言葉や論理を探し続けるというのは、やはり無理難題な作業であった。その豊かな神話世界、祭礼の輝き、社会生活への深い影響など、「語り得ないものを語る」ための試行錯誤だった。そんな私が大きく目を開かされたのは、クリストファー・スモールの「ミュージッキング」概念¹を起点とした、新たな音楽学や民族音楽学、音楽をめぐる人類学的研究の同時代的な胎動であった。そこでは、音楽を、分析対象としてのモノではなく、人間／非人間の別を超えた生成的な「場の力」として、つまりコトとして「音楽」（正確には「音楽すること」）の世界を捉えなおそうとする、つまりロゴスからピュシスへと音楽世界の探究を反転させていこうとする運動が盛んになされはじめたのである。

私もそうした流れを受け、音楽人類学者ジョージナ・ボーンの「音楽のアッサンブラージュ」概念²を援用した新たな表現を模索し、多領域にまたがる方々（音楽家、音楽教育者、音楽人類学者など）と共に編著にまとめることができた³。「音楽のアッサンブラージュ」とは、「ある音楽文化や歴史的時代の特徴的な媒介（音、言説、視覚、人工物、技術、社会、時間）の特定の組み合わせ」として、立体コラージュを作り上げるような「媒介（Mediation）」の力そのものと、それらの複合が生成させてしまう動体的な「場 Place」のことである。ここにきて「音楽」は、人間中心主義を脱し、本来のピュシス的な「力そのものの躍動」という、世界認識にまつわる根源的な問いの対象として立ち現れることになる。

2. 再び、「音楽」の生成空間へ

本来認識不可能で言語化することのできない領域（カント的にいうならば物自体の世界＝叡智界）に揺蕩う音楽なるものを、分節化して定位するという以外に、いかにして言語表現へと移し替えることができるのか。実はこの問いは、それほど新しいものではない。ゲーテは、詩と音楽が未分化に融合していた古代ギリシアの歌を理想とし、音楽は詩が本来持つ言葉のリズムや感情を忠実に引き出すためのものであるべきだと考え、音芸術（サウンド・アート）にまつわる実験を繰り返していた⁴。ショーペンハウアーは音楽を「意志＝あらゆるものの内的本質」の直接的な顕現（間接的な客体化ではなく、直接的な模像）とし、その表現形態を高く評価している⁵。

本稿はこの深淵なテーゼに何らかの答えを出そうとするものではない。ただ、その探究の一つのプロセスとして、（上記ショーペンハウアーの音楽理論に大きく影響を受けていた）シュタイナーの音楽論からの学びと、その具体的な実践の世界に分け入ってみた記録を紹介したい。シュタイナー教育における音楽の位置付けは、明らかにロゴスのなものからピュシスの音楽世界への回帰への目論みの一つとして捉えうるものであるし、そこで立ち上がってくる「音の力」の輪郭が、子どもたちの成長や発育に深い影響を与えるものとして重視されているからだ。

3. ルドルフ・シュタイナーの音楽論

彫刻、絵画など、音楽以外のあらゆる芸術は、自然の秘密の意図を推察するまえに、表象をまとめねばならない。それに対して、メロディー、ハーモニー、楽音は直接、自然自身の表明なのである。音楽家は、神の意志の脈拍が世界を貫くのを直接聴く。神の意思がいかに音のなかに表現されているのかを、音楽家は知覚する。音楽家は、他の芸術家よりも、世界の心臓の近くに立つのである⁶。

シュタイナーは、音楽的創造行為を「宇宙のなかでみずからを完成し、深めるため」の試みであると表現する。この「深める」という発想は、シュタイナーが生命の意識を三つの層に類型化していて、第一から第三の層へと移行する、つまり意識状態の階層的深化を人間教育の根幹においていることと繋がっている。この階層の移行（深化）の過程に、宇宙的な生命エネルギーが直接的な発露を迎える瞬間が置かれており、その前段階において世界を覆っていた「大いなる静けさ」は「響き」と「音」へと変質していく。こうした音の世界の残響は、私たちが普段意識することのできる最も浅い感覚世界でも聴くことになる。したがって、この最も深遠な世界と、その中間の感受体の世界、そして我々の表層的意識という三層は、音楽を通じて影響し合っている。一方で、シュタイナーの教育の根本的な目的は「自由になること」、すなわち自己の内なる「超感覚的なもの」の直感を通じて宇宙と調和することにあるので⁷、音楽（教育）という行為は「最奥の本質」に向けた実践的な歩み寄り、ということになるだろう。

このように、シュタイナーの説明は、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的な興隆をみた神秘学や神智学的言説に彩られており、一見極めてわかりにくいものが多い（アレルギー反応を示す読者も多いだろう）。英国の稀代の評論家であるコリン・ウィルソンも、シュタイナーを「20世紀のあらゆる重要な思想家の中で、おそらく最も研究しにくい人物」と評し、その文体を「おそろしく抽象的で、古くなったトーストのようにとても食えたしろものではない」とまで表現している⁸。しかし、シュタイナーは、本稿で扱いたい「音楽の力とは何か」というテーゼに、あらゆる言説を用いてピュシ的に肉薄

しようと努めた哲学者の一人として、異彩を放っていることは間違いないだろう。そこでは、音楽をロゴスの、表層的感覚で捉えようとするものの限界が語られているし、また音楽の世界を、感覚を超えた領域とそこで蔓延するエナジーの調和のメカニズムを知らないと捉えることができないものとして定位していることは、音楽をめぐる近年の研究の傾向からも（実体験からも）共感はできる。我々現代的な音楽研究者たちは、ミュージッキング・ショック以降に、人間とマテリアルなものを含み込んだ多様なアクターたちを結びつける媒介者（Mediator）として「音楽」を理解しようと考えてきたが、ゲート、ショーペンハウアー、シュタイナーと続く音楽論の系譜は、具体的なアクター間の関係性とは別の次元で満たされている「響き＝音の力」の根源的な調和作用に目を向けてきた、とまとめることができるだろう。

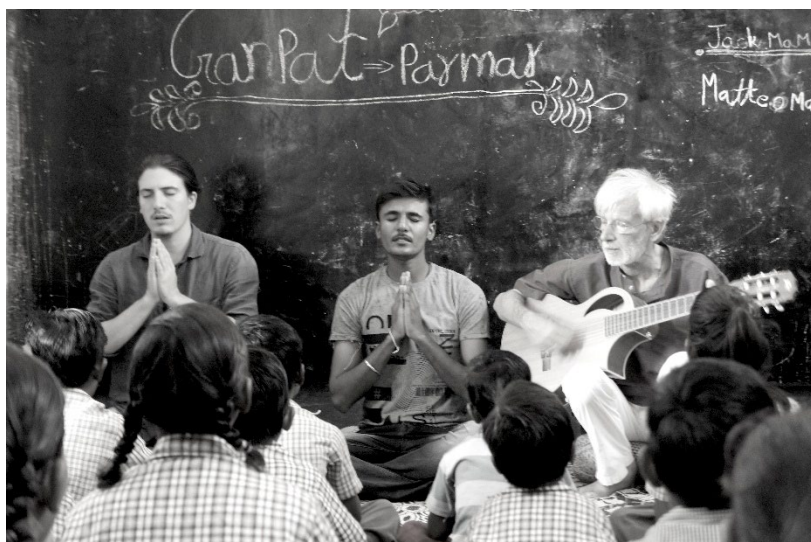
4. シュタイナー教育の現場へ：音楽が充満させる学びの力

このあまりにも解像度の低い理解を元に、筆者はこのシュタイナーの音楽論が、具体的な音楽教育の実践の場でどのように生きているのかを知りたいと思った。奇しくも、筆者が数十年通っているインドのタール沙漠に、フランス人と現地の有力者たちが力を合わせて作った自由ヴァルドルフ校（通称「シュタイナー学校」）が開校していた。また、筆者の興味はシュタイナーを経由して神智学思想史的な系譜へと分岐しており、その世界的活動の拠点となっているインド・チェンナイ市にはその影響を受けたシュタイナー学校がいくつも開校されていることを知った。本稿の後半部では、こうしたインドで展開しているシュタイナー教育の例をいくつかあげながら、その音楽理論の実践的側面の素描を簡単に行いたい。

筆者が初めてシュタイナー学校の教育の場に足を踏み入れることができたのは2018年のこと。タール沙漠の中心地ジャイサルメール県に開校した学校で、現地の公教育ネットワークから外れた「指定トライブ（Scheduled Tribe）」と呼ばれる、いわば「少数民族」の子どもたちを対象としていた。生徒は26名（当時）。本校は、沙漠の文化の保全とマイノリティの社会開発を目的として設立された仏印の協働NGOが2014年に創始したものだ。いずれはトライブの子供たちだけでなく、入学を希望する他の村落の多様な子どもたちをも受け入れて行く予定であると、校長のJ氏（60代男性、フランス国籍）は語った。

本校での参与観察のなかで、最も驚かされたのは、朝のミーティングである（現地ではMorning AssemblyやMorning Circleなどと呼ばれていた）。そのほとんどが、まるで音楽の授業か、音楽を使ったレクリエーションかのように感じられたのだ。筆者が観察したことのある他の公立学校が、全員起立した規律正しい空気感の中で国歌や州歌斉唱するのとは対照的に、静けさのなかで唱えられる「オーム」という音と短い瞑想の後は、突如として取り入れられたギターの伴奏を元に、ビートルズの楽曲やアメリカのバラード、フランスの民謡、現地語（マールワリー語）の民謡などの柔らかくポップな楽曲が立て続けに歌われた。子どもたちは目を輝かせ、上手に歌うというよりリズムに合わせて体を振るわせ、「がなりたてるように」大きな声を張り上げていた。その後の授業でも、実にうまく音楽が取り入れられていた。特筆すべきは、年少者のクラスに机や椅子がないことだ。子供たちは床に敷かれたカーペットで自由に動きながら、様々な活動に参加する。

レッスンが語学や算数であったとしても、アルファベットや数字などの発音をジェスチャーやステップを交えながら、メロディーとリズムに乗せて体得していくスタイルをとる。言葉や数字の響きや音程、リズムなどが身体表現のなかで体得されていく、ユニークな教授法である。このことについて、校長であるJ氏は、「色彩と言葉と数字と身体と感情は、全て一つのバイブレーションに集約することができる。そこが循環していないと、子どもの成長は見込めないんだ。だから僕は、



朝の集会ではギター伴奏と祈りが一体となり「音楽」の場を生成していた

教えるということはしない。バイブレーションを生み出す仕掛け(トリック)を作っているだけなんだ」(2018年3月5日)。彼の言葉から抽象的な神秘学的用語が飛び出すことはない。おそらく相当緻密に長い時間をかけてシュタイナー哲学を学んだであろうこの老教師は、長年の実践を経て、子どもたちの内なる力が溢れ出し、超感覚的な調和(彼の言葉でいうバイブレーション)と接続する、その感触を学びの場で生成させる技術を体得したのだろう。それが学びの空間として成功しているかどうかは、吹き出す汗をも拭わず、夢中になって音と一体になっている子どもたちの姿が証明してくれている、そう感じた。

チェンナイの郊外にある、海に近い緑地帯にひっそりと建造されたヴァルドルフ校チェンナイ。生徒は5~60名と、沙漠の学校に比べると遥かに多い。Morning Assemblyは8時50分から始まる。生徒全員と教職員が集合して輪を作り、「両親と友人、木と蜂と大地と風」に挨拶をする。沙漠の学校と大きく違うのは、この後に「祈り」の時間がしばらく続くことだ。「オーム」の詠唱から始まり、サンスクリット語の経文(chant)、タミル語の宗教詩(『ティルックラル』や『シラッパディハーラム』など)の朗誦が続く。これらのプロセスは、一見、極めて宗教的な儀礼行為に見えたが、教員たちはすぐにそうした筆者の感覚を否定した。この朝の詠唱は、宗教的思想や哲学というより、ただただ「音」が重要なのだ、という。校長は「精神の一番深いところに結びついている『音』に触れることで、マインドを開かせることが目的なんだ。聖なる詩は、その音において深い精神性が刻まれている。その力を使う。そこを経由しないと、学びが生み出されないのだ」と語った(2025年3月3日)。つまり、ここで「音楽をすること」は、世界と深いレベルでの対話を生み出す必要なプロセスなのだ。

音による意識の深化が図られたのちに、円の中心では火が焚かれ、周辺に置かれた小石が温められる。子どもたちは温かくなった小石をそれぞれ手に取り、おでこに当てていた。音で開かれたマインドに、火のエネルギーを注入する。学びへの準備段階だという。この過程は、沙漠の学校でみられたような子どもたちの爆発的なエネルギーの溢れ出す世界とは異なり、聖なる通奏低音によって静かに子どもたちの意識が解放されて、学びに向けた力が少しずつ充足していくような、そんな静謐な世界だった。

5. 音楽が紡ぐ生活世界

このように、教育の場では、シュタイナー哲学に見られる抽象度の高い神秘主義的な言葉遣いはほぼ使われず、その精神と思想を引き受けた人々の、実践を通じた具体的な言葉たちに満たされていた。そしてそれは、地域の環境や集まった子どもたちの気質などと重なり合いながら、多様なヴァリエーションを形成していることもわかってきた。

各教育現場において、朝の集会以降の授業で「音」や「音楽」がどのように取り入れられていたのか、詳細に記述していく紙幅がないのが悔やまれるが、とにかく、どのような「教科」であったとしても、そこに「音楽」を介在させることが徹底されていた。



インド古典舞踊を通じた、音と身体と知恵の接合

「音楽教育」とはなんなのだろう。ここでは、「音楽」は特別の領域を形成しているというより、すべての学びの通奏低音だった。今回触れることのできなかった、シュタイナー教育の核とされる「オイリュトミー」も、舞踊なのか演劇なのか、音楽なのか言語表現なのか、それらを分節することのできない混在した総合芸術の世界を目の当たりにすることのできる際立った領域である。そのように考えるとき、「音楽」という領域をアプリアリに存在する領域と

して認識することを出発点としている我々の意識そのものが、大きく揺さぶられる。シュタイナーの言うように、音楽は超意識的世界に偏在する調和の力なのだとしたら、我々の生きる生活世界全体に影響を及ぼす根源的なエネルギーなのだろう。チェンナイの校長（A氏、50代）が語ってくれた、「学びは生活の中に全て詰まっている。生活を満たしている空間こそが、そこで編まれる日々の経験こそが、学びそのもののものだ」という言葉が、重く響く。

音楽と教育という結びつきについて、子どもの学びについて、根底から揺さぶられるような経験を続けている。「音楽」を研究すること。「音楽」を教育すること。その不可能性と、可能性に、これからも頭を悩ましていきたい。

参考・引用文献

1. スモール、クリストファー 2011『ミュージッキング：音楽は〈行為〉である』野澤 豊一、西島 千尋（訳）、水声社。
2. Born, Georgina 2005 "On Musical Mediation: Ontology, Technology and Creativity", *Twentieth Century Music*, 2(1), pp.7-36.
3. 小西公大（編）2024『そして私も音楽になった：サウンド・アッサンブラージュの人類学』うつ堂。
4. 滝藤早苗 1996「ゲーテと音楽：彼の音楽観とその背景」『藝文研究』Vol.71, pp.248-262。
5. 井藤元、山原麻紀 2012「ルドルフ・シュタイナーの音楽理論：その思想的背景と教育実践の連関」『東京家政学院大学紀要』第52号、pp.45-54。
6. シュタイナー、ルドルフ 1993（1906）『音楽の本質と人間の音体験』西川隆範（訳）、イザラ書房、pp.17-18。
7. シュタイナー、ルドルフ 2002（1894）『自由の哲学』高橋巖（訳）、筑摩書房。
8. ウィルソン、コリン 1986『ルドルフ・シュタイナー：その人物とヴィジョン』中村保男、中村正明（訳）、河出書房新社